琉球大学学術リポジトリ

琉球沖永良部語正名方言の条件文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2015-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ハイス・ファン・デル・ルベ, Gijs van der Lubbe メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31116

【研究論文】

琉球沖永良部語正名方言の条件文

ハイス・ファン・デル・ルベ*

Conditional Sentences in the Masana Dialect of Okinoerabu Ryukyuan

Gijs van der Lubbe*

要旨

本稿であつかう対象は、琉球沖永良部語正名方言における因果関係を表現しているつきそい・あわせ文である。つきそい文の述語になる形式がさまざまである。条件をあらわすつきそい文の述語になる形式が 7 つあり（-iwa、-to、-tara、-tukja、-kja、-gaʃara）、日琉語族のなかでは、数が著しい。本稿は、形式ごとに、原因・理由（-tu(ni)）、契機（-tu）、条件（-iwa、-to、-tara、-tukja、-kja、-gaʃara）、うらめ（muN、-taNte）、ゆずり（-abamu、-timu）のように用法をとりだし整理した。さらに、共通する用法をもつ形式について、言語接触の結果の可能性があることを述べた。

Abstract

This study is about complex sentences that express cause and effect in the Masana dialect of Okinoerabu Ryukyuan. There are several forms that can function as the head of an adsentential clause. There are seven verb forms alone that can head a conditional clause (-i*wa*, -*to*, -*tara*, -*tukja*, -*kja*, -*gaʃara*, -*tu*). This is quite numerous for a Japonic language. The forms were classified as causal (-*tu*(*ni*)), temporal (-*tu*), conditional (-*iwa*, -*to*, -*tara*, -*tukja*, -*kja*, -*gaʃara*), adversive (*muN*, -*taNte*), and concessive (-*abamu*, -*timu*). As for the forms that have a similar function, this may be the result of language contact.

*琉球大学大学院人文社会科学研究科博士課程後期。Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Ryukyus.

はじめに

琉球諸語の条件文の研究としては、与論島朝戸方言と国頭村宇嘉方言をとりあげる町1983、宮古保良方言をとりあげる狩俣2007、沖縄語をとりあげる狩俣の「はじめての人のためのシマクトゥバの文法」（出版未定）があるが、琉球諸語の条件文の研究は、現在まだすくない。

本稿の資料は、著者が現地調査によって得たものである。資料提供者（話者）は、M.F.（S11女性）、H.T.（25男性）、N.N.（S17男性）の3人である。

つきそい文の出来事は、いいおわり文にさしだされる出来事の実現の根拠としてはたらくのだが、「根拠」というのは、原因、条件、理由、動機、目的、予定、前提、仮定、契機とさまざまある。本稿では、いいおわり文にさしだされる出来事の実現のための原因や条件などをつきそい文にさしだすとき、つきそい文の述語としてあらわれる文法形式を記述する。

１.条件文にあらわれる述語形式

Ⅰ.原因、理由、条件、契機などをあらわす形式

numiNtu/numiNtuni（のむから、のむので）

numiwa/numja（のめば）

numuto（のむと）

numiNtara（のむなら、のんだら）

numiNtukja（のむなら、のんだら）

numiNkja（のむなら、のんだら）

numiNgaʃara（のむなら、のんだら）、

nudatu（のんだら）

Ⅱ.ゆずり状況やうらめ原因などをあらわす形式

numinu muN（のむのに）

nudaNte（のんでも、のんだとしても）

nudimu（のんでも）

numabamu（のむにしろ）

図1.沖永良部語正名方言の条件形の一覧

	肯定	否定
原因	numiNtu (ni)	numaNtu (ni)
条件	numiwa (numja) numuto numiNtara numiNtukja numiNkja numiNgaʃara	numaNnja numaNto numaNtara numaNtukja numaNkja numaNgaʃara
契機	nudatu	×
うらめ	numinu muN nudaNte	numanu muN ×

ゆずり	nudimu numabamu	numadanamu ×

numiNtu/numiNtuni（のむから、のむので）は、原因と理由をあらわす。-tu(ni)という接辞が動詞、形容詞、コピュラの第二叙述形につく。肯定や否定、現在や過去、またはアスペクトをあらわす形式がすべてこの-tu(ni)原因形をとる。

numiwa（のめば）は、条件と契機をあらわすことができる。検定教科書文法のいわゆる已然形に接尾辞の-baがつき、日本語のノメバに相当する。-iwa条件形の音声的なバリアントとして-ja条件形がある。次のとおりである。

買えば	ho:riwa	→	ho:rja
飲めば	numiwa	→	numja

継続をあらわすシテオリ相当形式も-iwa条件形をとるが、シタ相当形式である過去形は、-iwa条件形をとらない。なお、つきそい文の述語が否定形をとっているとき、-iwa条件形のバリアントとして-ɲja条件形がある。

しない	ʃiraN(第二叙述形)＋-ɲja	→	ʃiraNnja
見ない	mjaN(第二叙述形)＋-ɲja	→	mjaNnja

numuto（のむと）も、条件と契機をあらわすことができる。-toという接尾辞がいわゆる旧連体形につく。旧連体形というのは、日本語の連体形に相当するものである。動詞numimu（のむ）の旧連体形は、numu-であり、現代沖永良部語正名方言においては、日本語のノムとことなり独自の形式としては存在しないが、接尾辞が修飾する語幹としては機能する。シテオリ相当形式も-to条件形をとるが、シタ相当形式は、-to条件形をとらない。なお、形容詞は、-to条件形をとらない。

numiNtara、numiNtukja、numiNkja（のむなら、のんだら）は、みな条件と契機をあらわすことができ、-tara、-tukja、-kjaは、動詞、形容詞、コピュラの第二叙述形につく。肯定や否定、現在や過去、またはアスペクトをあらわす形式がすべてこの3つの条件形をとる。図2のとおりである。

numiNgaʃara（のむなら）は、条件をあらわし、コピュラと動詞と形容詞の第二叙述形につく。肯定や否定、現在や過去、または継続をあらわす形式がすべて-ga□ara条件形をとる。図2のとおりである。

nudatuは、契機をあらわすことができる。過去をあらわす-ta-という形態素に直接-tuがつく。図2のとおりである。

図2.動詞の形態論的なタイプと原因、理由、条件、契機などをあらわす形式

	みる	おきる	える	まける	かう	おく	とぶ
叙実法1	mi:mu	ʔuimu	ji:mu	me:mu	hoimu	ʔukkimu	tubimu
叙実法2	miN	ʔui	jiN	meN	hoi	ʔukkiN	tubiN
-tu(ni)原因形	miNtu(ni)	ʔuitu(ni)	jiNtu(ni)	meNtu(ni)	hoitu(ni)	ukkiNtu(ni)	tubiNtu(ni)

-iwa 条件形	miwa (mi:wa)	ʔuiriwa (ʔuirja)	jiriwa (jirja)	me:riwa (me:rja)	ho:riwa (ho:rja)	ʔukkiwa (ʔukkja)	tubiwa (tubja)
-nja 条件形(否定)	mjaNnja	ʔuiraNnja	jiraNnja	me:raNnja	ho:raNnja	ʔukkaNnja	tubaNnja
-to 条件形	mju:to	ʔuiruto	jiruto	me:ruto	ho:ruto	ʔukkuto	tubuto
-tara 条件形	miNtara	ʔuitara	jiNtara	meNtara	hoitara	ʔukkiNtara	tubiNtara
-tukja 条件形	miNtukja	ʔuitukja	jiNtukja	meNtukja	hoitukja	ʔukkiNtukja	tubiNtukja
-kja 条件形	miNkja	ʔuikja	jiNkja	meNkja	hoikja	ʔukkiNkja	tubiNkja
-ga□ara 条件形	miNgaʃara	ʔuigaʃara	jiNgaʃara	meNgaʃara	hoigaʃara	ʔukkiNgaʃara	tubiNgaʃara
-tu 契機形	mittʃatu	ʔuitatu	jittatu	me:tatu	ho:tatu	ʔuttʃatu	tudatu

	もつ	しぬ	する	くる	いる	ある	わかい	である
叙実法 1	muttimu	ʃinimu	ʃi:mu	ki:mu	wu:mu	ʔa:mu	wakasamu	×
叙実法 2	muttiN	ʃiniN	ʃiN	kiN	wuN	ʔaN	wakasaN	jaN-[1]
-tu(ni)原因形	muttiNtu(ni)	ʃiniNtu(ni)	ʃiNtu(ni)	kiNtu(ni)	wuNtu(ni)	ʔaNtu(ni)	wakasaNtu(ni)	jaNtu(ni)
-iwa 条件形	muttiwa	ʃiniwa (ʃinja)	ʃiriwa (ʃirja)	kuriwa (kurja)	wuriwa (wurja)	ʔariwa (ʔarja)	wakasariwa (wakasarja)	jariwa (jarja)
-nja 条件形 (否定)	muttaNnja	ʃinjaNnja	ʃiraNnja	ɸuNnja	wuraNnja	naNnja	wakasa naNja	ʔanaNnja
-to 条件形	muttuto	ʃinuto	ʃiruto	kuruto	wuruto	ʔaruto	×	jaruto
-tara 条件形	muttiNtara	ʃiniNtara	ʃiNtara	kiNtara	wuNtara	ʔaNtara	wakasaNtara	jaNtara
-tukja 条件形	muttiNtukja	ʃiniNtukja	ʃiNtukja	kiNtukja	wuNtukja	ʔaNtukja	wakasaNtukja	jaNtukja
-kja 条件形	muttiNkja	ʃiniNkja	ʃiNkja	kiNkja	wuNkja	ʔaNkja	wakasaNkja	jaNkja
-ga□ara 条件形	muttiNgaʃara	ʃiniNgaʃara	ʃiNgaʃara	kiNgaʃara	wuNgaʃara	ʔaNgaʃara	wakasaNgaʃara	jaNgaʃara
-tu 契機形	muttʃatu	ʃidʒatu	ʃa:tu	kittʃatu	×	×	×	×

nudimu（のんでも）は、動詞、形容詞、コピュラのシテ相当の中止形に助詞 mu（も）がついた形で、ゆずり状況的なつきそい文の述語になる。

沖永良部語正名方言においては、否定形式には、シテ相当の中止形がこのような場合にはあらわれず、-dana 中止形がもちいられる。-dana 中止形に助詞 mu をくみあわせて、ゆずり状況的なつきそい文の否定述語になる numadanamu（のまなくても）になる。

numabamu（のんでも）も、ゆずり状況的なつきそい文の述語になることがある。検定教科書文法のいわゆる未然形に接尾辞の-ba がつき、日本語のノマバに相当する。

numinu muN（のむのに）は、うらめ原因をあらわすつきそい文の述語になる。muN は、名詞発生の接辞であるため、動詞、形容詞、コピュラの連体形にくみあわされる。

nudaNte（のんでも、のんだとしても）は、ゆずり状況的なつきそい文の述語になる。動詞の過去形に-te がついた形である。

図 3 動詞の形態論的なタイプとゆずり状況やうらめ原因などをあらわす形式

	みる	おきる	える	まける	かう	おく	とぶ
叙実法 1	mi:mu	ʔuimu	ji:mu	me:mu	hoimu	ʔukkimu	tubimu
-timu 形	mittʃimu	ʔuitimu	jittimu	me:timu	ho:timu	ʔuttʃimu	tudimu
-adanamu 形	mja:danamu	ʔuiradanamu	jiradanamu	me:radanamu	ho:radanamu	ʔukkadanamu	tubadanamu
-abamu 形	mja:bamu	ʔuirabamu	jirabamu	me:rabamu	ho:rabamu	ʔukkabamu	tubabamu
連体形＋muN 形	mi:nu muN	ʔuinu muN	ji:nu muN	me:nu muN	hoinu muN	ʔukkinu muN	tubinu muN
-tante 形	mittʃaNte	ʔuitaNte	jittaNte	me:taNte	ho:taNte	ʔuttʃaNte	tudaNte

	もつ	しぬ	する	くる	いる	ある	わかい	である
叙実法 1	muttimu	ʃinimu	ʃi:mu	ki:mu	wu:mu	ʔa:mu	wakasamu	×
-timu 形	muttʃimu	ʃidʒimu	ʃi:mu	kittʃimu	wuttimu	ʔattimu	wakasattimu	jattimu
-adanamu 形	muttadamamu	ʃinjadanamu	ʃiradanamu	ɸu:danamu	wuradanamu	na:danamu	wakasa na:danamu	ʔanadanamu
-abamu 形	muttabamu	ʃinjabamu	ʃirabamu	ɸu:bamu	wurabamu	ʔarabamu	wakasa ʔarabamu	jarabamu
連体形＋muN 形	muttinu muN	ʃininu muN	ʃi:nu muN	ki:nu muN	wu:nu muN	ʔa:nu muN	wakasanu muN	janu muN
-tante 形	muttʃaNte	ʃidʒaNte	ʃaNte	kittʃaNte	wuttaNte	ʔattaNte	wakasattaNte	jattaNte

２.原因的な条件をあらわすつきそい・あわせ文

原因的な条件をあらわすつきそい・あわせ文とは、ある出来事を事実的な根拠としてつきそい文にさしだして、その結果、実現した出来事をいいおわり文にさしだすことで、話し手が 2 つの出来事を原因・理由の因果関係としてむすびつけるつきそい・あわせ文である（奥田 1986）。個別的な動作や状態のあいだの原因・結果の関係をあらわすのに、-tu(ni)原因形がもちいられる。つきそい文でもいいおわり文でも過去、現在、未来のレアルな出来事がさしだされるため、つきそい文でもいいおわり文でも述語は、テンス・アスペクトによる形式がとられる。

numiNtu(ni)（のむから）　　nudaNtu(ni)（のんだから）
nuduNtu(ni)（のんでいるから）　　nudutaNtu(ni)（のんでいたから）

2-1.　原因をあらわす接辞-tu(ni)

動詞も形容詞もコピュラも-tu(ni)原因形をとることがある。話者の内省によると、今まで集めた用例で-tu になっているところを-tuni にかえても、違和感もないし、意味も変わらないということである。

次の用例では、未来の出来事がつきそい文にさしだされ、つきそい文の述語が非過去形になっている。3)は、いいおわり文が意志勧誘形であらわれ、はたらきかけ文になっている。

1) <oraNda>nu jiNga=nu <tʃo:sa> ʃi:ga <u>kiNtuni</u> hatte=gatʃi=wa ʔikaramu
オランダの男が調査しに<u>来るから</u>、畑には行けない。
2) tudʒi=wa na:tʃa naɸa=gatʃi ʔ<u>ikiNtu</u> du:tʃui nai =do:
妻は、明日沖縄に<u>行くので</u>、1 人になるよ。
3) na:tʃa naɸa=gatʃi <u>muduituni</u> na:biʃiru ʔaguʃi numa =ja:
明日沖縄に<u>帰るから</u>、今夜一緒に飲もうね。

次の用例では、つきそい文にさしだされる継続している動作や変化した後の結果的な状態が原因・理由になって実現する出来事がいいおわり文にさしだされている。

4) ma:=wa kuruma=nu <u>tu:tuNtu</u> ʔo:ʃaN =do:

ここは、車が通っているので、あぶないよ。

5) na: niku nattuNtu gja:gja=wa na: nibutunu hadʒi
もう遅くなっているので、おじいさんは、もう眠っているはずだ。

次の用例では、つきそい文にさしだされる出来事がすでに実現した過去のことであり、いいおわり文とのあいだにある原因・結果的な関係があらわされている。

6) ʔuja=ga nibututaNtu ja:=neti=wa ʔagu=tu ʔaʃibaradana ʔattaN
親が眠っていたから、家では、友達と遊べなかった。

7) kinju ʔura=ga harotaNtu, hju:=wa waga haroi
昨日、あなたが払ったから、今日は、私が払う。

つきそい文の述語が形容詞になって、人や物の状態が原因としてさしだされる場合もある。

8) hju:=wa ʔiʃugaʃaNtuni, madʒini ʔikaraN
今日は忙しいから、一緒に行けない。

9) ʔunu ʔju:=nu ho:=nu ɸubasaNtu, ʔaNme ʃikkaN
この魚の皮が硬いから、あまり好きじゃない。

つきそい文の述語になる否定形式も-tu(ni)原因形をとることができる。次の用例のとおりである。

10) gja:gja=wa <ʔawamori>ʃikkaNtu, <ʃo:tʃu:>=be: ʔoiʃiN
おじいさんは泡盛が好きじゃないから、焼酎ばかりめしあがる。

11) masanamuni=nu <ʔiNtone:ʃoN>natturaNtuni, nahi <reNʃu:> ʃiri
正名方言のイントネーションになっていないから、もっと練習しろ。

3.条件をあらわすつきそい・あわせ文

条件づけを表現するつきそい・あわせ文は、次の4つのタイプにわけることができる。定義は、かりまた（出版未定）のとおりである。

1)条件的なつきそいあわせ文：　条件となる出来事が状況や話し合いの場面のなかにあたえられていて、その条件的な出来事のもとに実現する出来事をいいおわり文に実現するつきそいあわせ文である。

2)仮定的なつきそいあわせ文：　あたえられた場面や状況のなかから可能性としての出来事を話し手自らが設定した仮定的な条件のもとに、話し手の積極的な態度や意志を表明するつきそいあわせ文である。

3)前提的なつきそいあわせ文：　話し手がある出来事の実現、話し手の評価を前提としてつきそい文にさしだして、いいおわり文に話し手自身の意欲や意志をあらわしたり、聞き手への願いや命令をあらわしたりするつきそいあわせ文である。

4)契機的なつきそいあわせ文：　つきそい文といいおわり文のあらわす2つの出来事が原因理由的な因果関係や条件づけ的な因果関係をあらわさず、2つの出来事のあいだの時間的な契機性をあらわす。

この4つのタイプにより、形式がことなる。正名方言には、7つの条件形がある。かならずしも上の4つの条件的なつきそいあわせ文のタイプによってこの7つの形式がきびしく使い分けられているとはいえないが、タイプによっていずれかが出やすいというような傾向はある。

3-1.　-iwa 条件形を述語にもつ条件文

-iwa 条件形は、日本語のスレバ相当形式になる。当該形式は、主に条件的なつきそいあわせ文と契機的なつきそいあわせ文にもちいられる。

次の用例では、-iwa 条件形を述語にするつきそい文にさしだされる条件がいいおわり文のさしだす出来事の実現のための条件である。そういう意味でいいおわり文のさしだす出来事は、条件があれば実現し、なければ実現しない可能性としてポテンシャルな出来事である。

12) tʃu:=wa karada=nu ʔubisa:rja ʃugutu ʃirariN
　人は、体が大きければ、仕事ができる。
13) ʔerabu=neti=wa muni kikiwa ʔuda=nu ʃima=kara kittʃaN =ka wakai
　沖永良部では、言葉を聞けば、どこの集落から来たか分かる。
14) saki=dake ʔariwa nu:=mu ka:raN
　酒だけあれば、何も要らない。
15) kusui numiwa noi =do=ja:
　薬を飲めば、直るよね。
16) <reNʃu:>ʃirja dʒo:di naimu
　練習すれば、上手になる。

次の用例では、つきそい文にさしだしている条件がみたされず、いいおわり文の出来事が実現しなかったため、非レアルになる。

17) na: ʔunu gja:gja ʔaʃi mo:ʃi wuraʃiga, me:riwa na: hjaku ʔamai =ga
　もうそのおじいさんおばあさん、亡くなって、いないけど、いらっしゃればもう100才あまりよ。

18) ʔami=nu ɸutti ʔarja hana=nu sattʃanu hadʒi
雨が降ったら、花が咲いたはずだ。
19) ʔari=ga ʔunu tuki <ʃippai>ʃi: ʔariwa, me:tanu hadʒi
彼がそのとき失敗したら、負けたはず。
20) nama ʃu:kja jukwattanu muN
今やっておけばよかったのに。
21) ʔura=ga tʃantu <ʃitʃidʒi>=ni ʔu:tʃi kuririwa manioitanu muN
お前がちゃんと 7 時におこしてくれれば、間に合ったのに。

次の用例では、-iwa 条件形を述語にするつきそい文のあらわす出来事といいおわり文のあらわす出来事が条件づけ的な因果関係をもっておらず、その 2 つの出来事のあいだに時間的な契機性があるため、契機的なつきそいあわせ文になる。

22) na:tʃa nariwa ma:=ne gumi=nu ʔaN
明日になったら、ここにごみがある。
23) natʃi nariwa hi:bi ʔattʃamu =djo
夏になったら、毎日暑いよ。

つきそい文の述語が否定形をとるばあい、-iwa 条件形が-nja としてあらわれる主に条件づけ的なつきそいあわせ文にもちいられる。-nja 条件形は、日本語のセネバ形式に相当すると考えられる。
次の用例では、条件づけ的なつきそいあわせ文である。

24) mja:=nu wuraNnja ɸa:tu=nu tudi ki:mu
猫がいなければ、鳥が飛んでくる。
25) <reNʃu:>ʃiraNnja dʒo:dʒi naramu
練習しなければ、上手にならない。
26) <ʔiʃa>=ni mittʃi muroraNnja warusa nai =do:
医者に診てもらわなければ、悪くなるよ。
27) midi numaNnja tʃiburu jamiN
水を飲まなければ、頭が痛い。
28) kwa: natʃi mjaNnja ʔuja=nu ʔuNgi=wa wakaraN
子供を生んでみなければ、親の恩義が分からない。
29) wakasa:nu tukini munugutu kaNge:raNnja tuʃi jutti=kara naNgi ʃiN =do:
若いときに物事を考えなければ、年をとってから難儀するよ。

次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文に-nja 条件形の使用を示している。

30) ʔari=ga ʃiraNnja, ʔura=ga ʃiri =yo:
彼がやらなければ、お前がやれよ。

31) mumigutu naNnja gutʃi ɸukkuna
問題がなければ、文句を言うな。

-nja 条件形に naramu（ならない）をくわえて、日本語のシナケレバナラナイに対応する義務をあらわす形式がつくられる。

32) ɸuNnja naraʃiga, nama kittʃuramu =djo
来なければならないが、まだ来ていないんだよね。
33) kibati <benkjo:>ʃiraNnja naramu
頑張って勉強しなければならない。

3-2. -to 条件形を述語にもつ条件文

-to 条件形の使用範囲は、-iwa 条件形とほとんど同じであり、主に条件づけ的なつきそいあわせ文と契機的なつきそいあわせ文にもちいられる。話者の内省によると、-to 条件形が割りと最近できた言い方であるとのことである。日本語の影響でできた言い方であると考えられる。

次の用例は、条件づけ的なつきそいわせ文である。

34) nama <ʔo:dzumo:>=neti <saNpun> ʃigitʃi ʃiruto=wa<gjo:dʒi>=nu tumiN =sa
今大相撲で 3 分過ぎてやると、行事が止めるさ。
35) tʃiNʃi ʔuttuto jamiN
膝を打つと痛い。
36) saki numatʃi mju:to ʔunu tʃu:=nu kimugukuru=nu wakai
酒を飲ませてみると、その人の心が分かる。
37) jo:ʃanu muN jantu ʔuri kamaNto=wa<koNdo> tʃu:=nu wugibatte ʔidʒi wugi kamiN =gi=jo:
ひもじいもんだから、それを食べないと、今度人の砂糖きび畑に行って砂糖きびを食べるわけよ。

次の用例で示しているように、契機的つきそいあわせ文にも-to 条件形がもちいられる。

38) wa: ɸuʃi=nu jamuto=wa ʔami=nu ˙ui =do:
私の腰が痛かったら、雨が降るよ。
39) ʔe:da=nu tubuto=wa hadi ɸukkiN =do:
トンボが飛ぶと、風ふくよ。

-iwa 条件形と-to 条件形がことなる点として、つきそい文にさしだしている条件がないため、いいおわり文の出来事が実現しなかった場合にはもちいられない点がある。

40) ×nama ʃu:kuto jukwattanu muN
今しておけばよかったのに。

否定形も-to 条件形をとることがある。次の用例は、条件づけ的なつきそいあわせ文である。

41) kwa: natʃi mjaNto ʔuja=nu ʔuNgi=wa wakaraN
子供を生んでみなければ、親の恩義が分からない。

3-3. -tara 条件形を述語にもつ条件文

-tara 条件形は、仮定的なつきそいあわせ文と前提的なつきそいあわせ文にもちいられることが多い。

次の用例は、前提的なつきそいあわせ文であり、つきそい文の出来事の実現・実行を前提にして、話し手にとってのぞましい出来事がいいおわり文にさしだされる。いいおわり文に話し手自身の意欲や意志をあらわしたり、聞き手への願いや命令をあらわしたりする。

42) kwa:=nu hanaʃa ʔaNtara gutʃi ɸukkuna
子供がかわいいなら、文句をいうな。
43) nuitara numuna
乗るなら、飲むな。
44) mumigutu naNtara gutʃi ɸukkuna
問題ないなら、文句をいうな。
45) ʔari=ga ʃiraNtara, ʔura=ga ʃiri =yo:
あいつがやらないなら、お前がやれよ。
46) jaʃiki hoitara ja:=nu hata ho:ri
宅地を買うなら、家の側を買え。
47) hani=nu ʔaNtara tudi ʔikibuʃa =ja:
羽があったら、飛んでいきたいね。
48) ʔura=ga ʔikiNtara wanu=mu ʔikiN
お前が行ったらおれも行く。

次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文であり、つきそい文にさしだされる出来事が実現すると、話し手がのぞましいとする出来事の実現がいいおわり文にさしだされる。

49) ʔura=ga ʔari ʔoNmiNtara waga ʔura <ʃukudai> ʃiN =ga
お前が彼をなぐったら、おれがお前の宿題をするわ。
50) numiNtara nuNna
飲んだら、乗るな。

-tara 条件形は、条件的なつきそいあわせ文にももちいる。

51) ʔari=wa nama ʔo:saka=ne=du wuNtara ja:=ne=wa taru=mu wuranu hadʒi
彼は今大阪にいるのなら、家には誰もいないはずだ。

52) gaNnjanu kutu ʃiNtara ʔama=ga waʃimikiN
そんなことしたら、お母さんが怒る。
53) satta ʔirikwa ʃiNtara ʔutturuʃa ʔamasa nai
砂糖を入れすぎたら、非常に甘くなる。
54) ʃiNbuN miNtara nu:=mu wakai
新聞を見たら、何でも分かる。

-tara 条件形は、動詞の過去形につくとき、つきそい文といいおわり文があらわす 2 つの出来事のあいだの時間的な契機性をあらわす。

55) ʔagu=nu <ʔo:imi>di gaitʃaNtara<hai> gaitʃaN =gi=jo:
友達が「オーイミ」と言ったら、「はい」言ったわけだよ。

3-4. -tukja 条件形を述語にもつ条件文

-tukja 条件形の使用は、-tara 条件形とまったく同じであり、元よりは、この 2 つの形式の使用は、地域差であると考えられるが、現在は、正名方言話者がいずれももちいるようになっている。

次の用例は、-tukja 条件形が前提的なつきそいあわせ文にもちいられる用例となる。

56) nuitukja numuna
乗るなら、飲むな。
57) ʔari=ga ʃiraNtukja, ʔura=ga ʃiri =yo:
あいつがやらなければ、お前がやれよ。
58) mumigutu naNtukja gutʃi ɸukkuna
問題ないなら、文句を言うな。
59) jaʃiki hoitukja ja:=nu hata ho:ri
宅地を買うなら、家の側を買え。
60) hani=nu ʔaNtukja tudi ʔikibuʃa =ja:
羽があったら、飛んでいきたいね。

次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文である。

61) <ʔitʃimaNeN>haroitukja wana: nu:=mu gajaN =do:
一万円を払ったら、私は何も言わないよ。

次の用例は、つきそい文の述語が-tukja 条件形をとっている条件的なつきそいあわせ文の用例である。

62) ʔari=wa nama ʔo:saka=ne=du wuNtukja ja:=ne=wa taru=mu wuranu hadʒi
彼は今大阪にいるなら、家には誰もいないはずだ。

-tukja 条件形は、-tara 条件形と同じく動詞の過去形につくばあい、つきそい文といいおわり文があらわす 2 つの出来事のあいだの時間的な契機性をあらわすこともある。

63) waga ʔuri gaitʃaNtukja ʔari=ga waʃimitʃamu
私がそう言ったら、彼が怒った。
64) gaNʃaNtukja<sugu> ʔiʃi nagiratti=yo:
そうやったら、すぐ石をなぐられてね…

3-5. -kja 条件形を述語にもつ条件文

-kja 条件形の使用範囲は、-tukja 条件形と-tara 条件形と同じであるが、高年層の話者によると、元よりは、正名で-kja 条件形をもちいないそうであるが、現在は、正名の中年層のなかでもちいられるため、ここであつかうことにする。

次の用例では、-kja 条件形が前提的なつきそいあわせ文にもちいられる。

65) ʔura hima naNkja wanu nakautʃi ʃira=i?
あなた暇ないなら、わたしナカウチしようか。

次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文である。

66) haroikja waga <so:dʒi> ʃiN =do:
払ったら、私が掃除するよ。

次の用例は、条件的なつきそいあわせ文の用例である。

67) <reNʃu:>ʃiNkja dʒo:dʒi naimu
練習したら、上手になる。

動詞の過去形に-kja 条件形がつくばあい、契機的なつきそいあわせ文になる。

68) do:ka <hjo:dʒuNgo>=ʃi hanatʃi kuriri =di:ʃi ʃaNkja, ʔunu ʔatu=kara na: wakatamu =ditʃi
どうか標準語で話してくれということをしたら、その後でもう分かったと。

3-6. -gaʃara 条件形を述語にもつ条件文

-gaʃara 条件形の使用範囲も-tara 条件形、-tukja 条件形、-kja 条件形と似ているが、契機性をあらわすのにもちいられない。話者によると、-gaʃara 条件形は、古い言い方であり、現在は、使用頻度が低くなっている。

次の用例は、前提的なつきそいあわせ文である。

69) ʔura=ga ʔikiNgaʃara wanu=mu ʔikiN
あなたが行くなら、私も行く。

70) kwa:=nu hanaʃa ʔaNgaʃara gutʃi ɸukkuna
子供がかわいいなら、文句を言うな。
71) nuigaʃara numuna
乗るなら、飲むな。
72) ʃigutu taNmiNgaʃara ʔagu=gatʃi taNmi
仕事を頼むなら、友達に頼め。
73) <nimotsu>muttiNgaʃara du:tʃui=ʃi mutti
荷物を持つなら、1 人で持て。
74) ʔaro=neti ʔaʃibiNgaʃara<bo:ʃi> haburi
外で遊ぶなら、帽子を被れ。
75) kuruma muttiNgaʃara saki=wa numaNkoi ʃiri
車を持つなら、酒を飲まないようにしろ。

次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文である。

76) numiNgaʃara nuNna
飲めば、乗るな。

次の用例は、条件的なつきそいあわせ文である。

77) ʔari=wa nama ʔo:saka=ne=du wuNgaʃara ja:=ne=wa taru=mu wuranu hadʒi
彼は今大阪にいるのなら、家にはだれもいないはずだ。

3-7. -tu 条件形を述語にもつ文

過去形になっているつきそい文の述語が-tu 契機形をとるばあい、つきそい文といいおわり文があらわす 2 つのアクチュアルな出来事のあいだの時間的な契機性をあらわす。この形式は、過去形しかない。

78) waga mukaʃi=nu hanaʃi ʃa:tu ʔari=ga waʃimitʃamu
私が昔の話をしたら、彼が怒った。
79) waga ʔuri kittʃatu ʔari=ga gaNʃi narotʃi kuritaN
私がそれを聞いたら、彼がこういう風に教えてくれた。
80) waga nibututatu ʔari=ni ʔu:satti =jo:
私が眠っていたら、彼におこされてよ。
81) Nga wakaranu muN wakaramu=ditʃi gajadina =di ʃa:tu, <jeNrjo> ʃi: gajaramu =ditʃi...
なぜ分からないのに分からないと言わないかと言ったら、遠慮して言えないと…
82) ja:=gatʃi ʔittʃatu ʔama=ga wuttaN
家に入ったら、お母さんがいた。

4.うらめ・ゆずり的なつきそい・あわせ文の述語形式

うらめ・ゆずり的なつきそいあわせ文は、原因・結果の関係が別の要因によって原因として正当にはたらかないことをあらわす。うらめ原因的な関係が事実的であって、つきそい文の出来事もいいおわり文の出来事もレアルであれば、うらめ原因的なつきそいあわせ文になり、うらめ原因的な関係が条件的であって、つきそい文の出来事がポテンシャルか、非レアルであれば、ゆずり状況的なつきそいあわせ文である。

4-1. 連体形＋muN 条件形を述語にもつ条件文

うらめ原因的な条件をあらわすつきそい・あわせ文の述語には、連体形＋muN 条件形が使用される。連体形＋muN 条件形を述語にもつ文は、事実的なうらめ原因的な関係をあらわし、つきそい文にもいいおわり文にもレアルな出来事が表現される。肯定や否定、現在や過去、またはアスペクトをあらわす形式がすべて muN の前に来ることがある。

次の 83)の用例は、つきそい文の述語の形は動詞の非過去形であり、いい終わり文には、過去のレアルなできごとがあらわれている。

83) ma:ni=wa ʔari=ga ki:nu muN, kinju=wa fu:dana ʔattaN
普段は、彼が来るのに、昨日は来なかった。

84) <koNdo>=wa wakja kwa:=nu <butai>=gatʃi ʔidʒinu muN gja:gja=wa fu:mu =di
今度は、うちの子が舞台に出るのに、おじいさんは来ないそうだ。

次の用例のうらめ原因的なつきそい・あわせ文は、現在のレアルな出来事の因果関係をあらわし、つきそい文の述語は、継続相の形をとっている。

85) mu:ru tattʃunu muN ʔanu <se:to>=wa tattaN
皆立っているのにあの生徒は立たない。

86) ʔunu ʔju:=wa tutti=kara tiNge tattʃunu muN nama ʃidʒuraN =ja:
この魚は、とってからしばらく経っているのに、まだ死んでいないね。

次の用例は、運動をおこなわないことがうらめ原因になり、つきそい文の述語の形が否定形になっている。

87) tʃu:sa ʔusuturanu muN kuruma=nu ʔuNkinu gi:=nu ʔaro:
強く押していないのに、車が動くわけがあるもんか。

88) ʔari=wa <zeNzeN> ʃumutʃijumanu muN Nga <toʃokeN> kuriN=jo
彼はぜんぜん本を読まないのに、なんで図書券をあげるのか。

次の用例は、つきそい文の述語になる条件文は、過去形の連体形に muN をつけた形が、過去のレアルな出来事に関して因果関係をあらわす。

89) jumibuʃa ʔattanu ʃumutʃijattanu muN, niga ɸunagiti=jo?
読みたかった本だったのに、どうして捨てたか。

90) ʔanu jagi ʃinjaN=di ʃu:tanu muN nama ʃidʒuraN =ja:
あのヤギ死のうとしていたのに、まだ死んでいないね。

4-2. -taNte 条件形を述語にもつ文

-taNte 条件形もつきそい文の述語につかわれて、ゆずり状況的なつきそいあわせ文をつくっている。いいおわり文のできごとがのぞましくないばあいに-taNte 条件形が用いられる傾向が見られる。

91) ʔuri=ʃi <keNʃu:>ʃaNte=wa nu:=mu tʃuburu=ni ʔjaN
それで研修しても何も頭に入らない。

92) ʔikja: ʃaNte ʃiramu
どうしてもやらない。

4-3. -timu 条件形を述語にもつ文

つきそい文の出来事が実現するにもかかわらず、いいおわり文の出来事がそれに影響を受けずに、前と同じく成立するばあいに、つきそい文の述語が-timu 条件形をとる。このとき、つきそい文の出来事もいいおわり文の出来事もポテンシャルである。

93) wunagu=wa ʔikja:sa hataratʃimu<kju:rjo:>=wa ʔagaramu
女はいくら働いても、給料はあがらない。

94) ʃinna =ditʃi gaitʃimu ʃiN =do=ja:
するなと言ってもするよね。

95) satta ʔiritimu ma:ku naN
砂糖を入れても、おいしくない。

96) ʃigutu ʔibiritimu ʃi:=du ʃiN =do:
仕事を飽きても、するんだよ。

97) ʔikjasa mutʃikasattimu ʃi: miN =ga
いくら難しくてもやってみるわ。

-timu 条件形に jukkwamu（よい）をくみわせて、許可をあらわす形式がつくられる。

98) nibutimu jukkwaN =do:
眠ってもいいよ。

4-4. -adanamu 条件形を述語にもつ文

-adanamu 条件形を述語にもつ文は、-timu 条件形の否定形であり、つきそい文の述語が否定形式になるばあいにもちいられる。

99) <kaNdʒi>jumaradanamu ʃigutu ʃirariN
漢字が読めなくても仕事できる。

100) ja:danamu dariraN

座らなくても疲れない。

4-5. -abamu 条件形を述語にもつ文

-abamu 条件形を述語にもつ文は、-timu 条件形を述語にもつ文とかさなる部分が多いが、正反対、あるいは類似の意味のことがらを重ねて述べ、「どのようなことをしても・何があっても」というニュアンスでもちいられる傾向がみられる。

101) ʔakkabamuwudurabamu jukkwantu tʃa:ma=wa <ʔundo:> ʃi: jaseri
あるいても走っても いいから、少しは運動して痩せろ。

102) <ʔoranda>tʃu jarabamu, ʔerabutʃu jarabamu mu:ru junu niNgiN =dja
オランダ人であっても、沖永良部人であっても、皆同じ人間だ。

103) ta:sa ʔarabamujasa ʔarabamu ho:ri
高くても安くても買え。

まとめ

沖永良部語正名方言の条件をあらわす形式と条件文を分析した上で、今までの琉球諸語の研究にとりあげられていないいくつかの特徴が見えてくる。

契機性をあらわすには、他の条件文に用いられない独自の形式がある。-tu 契機形は、-tu 原因形と元は同じであり互いに用法がことなってきたと考えられる。

当該方言は、沖縄語（かりまた出版未定）とことなり、条件をあらわすつきそいの述語になる形式が前提的条件と仮定的条件によって形式が使い分けられる傾向がみられない。両方が-tara、-tukja、-kja、-gaʃara によって表現され、この 4 つのなかで一つが話者の内省によって「一番適切」とされるわけではない。同じ用法をもつ形式が 4 つある原因は、おそらく正名方言とその周辺の方言との接触によると考えられる。-kja は、高年層の話者に「よその言い方」とされる。-tara、-tukja、-gaʃara もかつて地域差であったと考えられる。高年層の話者を中心とする、この形式の地理的分布の調査が必要である。

条件形の分析によって沖永良部語と日本語との接触がはっきり見える現象もいくつか見えてきた。次にその例を 2 つあげる。

-to 条件形は、他の北琉球語群の変種には見られない形式である。日本語のト条件形の影響できたものであると言ってよかろう。日本語の-to という形態素が借用され、正名方言の動詞の旧連体形につけられるというのは、日本語の形態素がそのまま琉球諸語の語形につけられる珍しい例である。

ゆずり条件形をあらわす-timu 条件形と-abamu 条件形は、話者の内省によると前者が新しい言い方で後者が古い言い方であるということから-timu が日本語のテモ条件形の影響でできた言い方だと考えてよかろう。そうであれば、正名方言の-timu 条件形が日本語の

構造を正名方言に存在する形態素をもちいてまねられたものであり、Heath（1984：367-368）が定義した structural convergence（構造収束）の一例であると言ってよい。

【注記】

[1)]コピュラの第一叙述形は、jaN であるが、接続詞か終助詞 sa がつくときだけあらわれる。

【参考文献】

奥田靖雄（1986）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文—その体系性をめぐって—」『教育国語』第 87 号。

狩俣繁久（2007）「宮古保良方言の条件形」『南東文化』沖縄国際大学南東文化研究所紀要、第 29 号。

狩俣繁久（出版未定）「初めての人のためのシマクトゥバの文法」。

町博光（1983）「対他的条件法と対目的条件法ー与論朝戸方言・国頭宇嘉方言を例としてー」『広島女子大学部紀要』18 号所収、S58・3。

Heath, J.G. (1984) *Contact and Language Change*, Annual Review of Anthropology. (Vol. 13, pp. 367-384).